

じんけんふれあいシリーズ⁽²¹⁾
ともに生きる喜びを実感できる
地域社会の実現

平成27年度人権標語優秀作品
握る手の暮らしに差別のない温(ぬく)み 姫野 正夫さん

ネットに「外国の人から見た日本人はどんな人たち？」があり、それには「迷信深い」「周りを気にする」などがあげられていました。日豊教区・部落差別・諸差別からの解放協議会が編集している「門徒もの知らず」暮らしの中の迷信と差別」に、「昔ながらの迷信や、非合理的な偏見が『同和問題』の解決に深い影を落としている」ということは、1965年の『同和対策審議会答申』

906(明治39)年と1966(昭和41)年です。1906年は139万人出生しています。前年より6万人、翌年より22万人少ない数です。前後年の平均と比べて約10%減少しています。1966年の出生数は136万人で、前年より46万人、翌年より58万人少なく、前後年の平均より27%も減っているのです。1966年の驚くほどの出生数低下を作り出したのは、ある女性週刊誌の記事の影響でした。

丙午(ヒノエウマ)生まれの女性には「清め塩」をしていることに対して、「私の亡くなった子どもはケガレているのですか」といわれハツとしたそうです。自分の父が亡くなり病院から自宅へもどる父の死体の横で幼い息子が寝ているのを見た人が非難しました。その時、父の霊が孫にわざわいをおよぼすはずはない。死者の霊を不浄なものとする迷信を無くさないといけないと強く感じたそうです。藤村さんは、疑問を持たずに聞かされたことを、次の時代に送ることが迷信がなくならない原因であり、見直す事が大切と話を結んでいました。

丙午(ヒノエウマ)生まれの女性に放火した丙午(ヒノエウマ)に生まれの八百屋お七は「恋仲の寺小姓に会いたい一心で自宅に放火した丙午(ヒノエウマ)に生まれの八百屋お七」として浄瑠璃や歌舞伎などの芝居の題材として取り上げられています。史実はほとんどわかっていません。「天和笑委集」に「恋のため放火し火あぶりにされた八百屋の娘」とあるだけです。丙午(ヒノエウマ)に生まれたという記録はありません。

1、迷信が丙午(ヒノエウマ)の年の出生数を下げる

全国の丙午(ヒノエウマ)の年の出生数が記録としてあるのは、1

2、いまだに残る不浄という名の迷信

寺住職の藤村さんが講演で、迷信である3つの不浄がいまだに

残っているという話をしました。白不浄はお産のことで、お宮参りの時母親は鳥居から入れず祖母が赤子をだいてまいる慣習は迷信からうまれていきます。赤不浄は血・月経のことでこの迷信は女性差別を生み出しています。黒不浄は死のことで、死んだ人を不浄として扱う迷信は、着物の左前・茶碗に山盛りにもったごはんをそれに刺した箸(ハシ)・枕団子・死んだ人の茶碗をわるなどの因習としてありますと話していました。藤村さんは、幼い子どもを亡くした母親から「清め塩」をしていることに対して、「私の亡くなった子どもはケガレているのですか」といわれハツとしたそうです。自分の父が亡くなり病院から自宅へもどる父の死体の横で幼い息子が寝ているのを見た人が非難しました。その時、父の霊が孫にわざわいをおよぼすはずはない。死者の霊を不浄なものとする迷信を無くさないといけないと強く感じたそうです。藤村さんは、疑問を持たずに聞かされたことを、次の時代に送ることが迷信がなくならない原因であり、見直す事が大切と話を結んでいました。